歴史とまつりのまち・四条

794 年の平安京遷都に際し、都のメインストリートとして造られた四条大路。
通りは長い歴史のなかで八坂神社の参道として栄えてきました。
鎌倉・室町期ごろには「立ち売り」と呼ばれる商人たちが集まるようになり、芸能・文化の中心地としても発展していきました。
そんなまちの歴史や伝統は、四条界隈の名所やまつりのなかにいまも受け継がれています。

【八坂神社】

京の都を東西に貫く四条通。その東の起点である東山のふもとに鎮座するのが八坂神社です。世界に名高い祇園祭はその例祭であり、全国にある八坂神社や素戔嗚尊（すさのをのみこと）を祀る約２，３００の神社の総本社です。古くは祇園感神院（ぎおんかんじんいん）、祇園社と呼ばれ、京の人々からは「ぎおんさん」の名で親しまれています。
社伝によると、創建は平安京が造られるよりもさらに古く、斉明天皇２年（６５６年）に朝鮮半島からの使節が朝鮮の神話の舞台となっている牛頭（ごず）山の神をこの地に祀ったことに始まるといわれます。本殿は承応3年（１６５４年）に徳川四代将軍家綱が再建したもので、最近、国宝に指定されました。素戔嗚尊と櫛稲田姫命（くしいなだひめのみこと）、八柱御子神（やはしらのみこがみ）の三柱の御祭神が祀られています。

【祇園祭】

四条のまちを知るうえで欠かすことができない伝統文化といえば祇園祭。山鉾行事はユネスコ無形文化遺産に登録され、毎年７月には世界中から多くの人々が訪れます。貞観１１年（８６９年）、疫病の流行を引き起こす怨霊を鎮めるため、６６本の矛（ほこ）を立て、祇園社（八坂神社）から神泉苑（しんせんえん）に神輿を送って牛頭天王を祀った「御霊会（ごりょうえ）」が祭の起源といわれ、のちに町ごとに風情を凝らした山鉾が建てられるようになりました。
四条通では7月１７日の前祭（さきまつり）と２４日の後祭（あとまつり）に山鉾が巡行し、八坂神社の御祭神である三柱の御神霊を遷した三基の神輿が七日間にわたって四条新京極南にある御旅所へ渡御します。

【祇園祭の粽（ちまき）】

祇園祭では八坂神社をはじめ、山鉾町ごとに粽が授与されます。これは食べるものではなく、家々の玄関先に飾って厄除けにするもので、「蘇民将来之子孫也（そみんしょうらいのしそんなり）」と書かれているのが特徴です。
その昔、一夜の宿を求めて訪れた旅人があり、巨旦将来（こたんしょうらい）という裕福な男は冷たく断りますが、その弟で貧しい蘇民将来は精一杯もてなしました。その旅人こそ実は素戔嗚尊で、返礼に代々子孫を疫病から守ると約束し、目印として茅の輪（ちのわ）を作らせたことが祇園祭の護符のはじまりといわれています。

【冠者殿社（かんじゃでんしゃ）と誓文払（せいもんばらい）】

御旅所の西隣、にぎやかなまちなかにひっそり佇む冠者殿社は八坂神社の境外摂社。御祭神は素戔嗚尊で、本社がおだやかな和魂（にぎみたま）であるのに対し、冠者殿には猛々しい荒魂（あらみたま）が祀られています。その荒ぶる神が天照大神（あまてらすおおみかみ）に対して偽りのない心を誓約したという由緒から「誓文」の神様として京・大阪の商売人から信仰を集めてきました。
１０月２０日の例祭は別名「誓文払」と呼ばれ、一年の嘘、偽りを侘びる日とされました。これがいつしか商人たちが日ごろの駆け引きを振り返り、感謝を込めて大安売りをする日となりました。いわゆるバーゲンセールの走りといえるもので、現在では毎年「大福引会」が行われています。